1.11. ウィーン便り (11) —— 国際原子力機関（IAEA）に勤めて：生活周辺の話題 (2002.12) ——

12 月に入ると街はクリスマスムードになる。カトリックのウィーンでは、元々は可愛いクリストキントゥが子供にお土産を運んで来た。キリスト教音痴なのでこのことは最近知った。16 世紀頃のオランダで子供達に贈り物を配ったとされる聖ニコラスが原型となってイギリス、アメリカにこの習慣が伝わる間に「白髭のサンタクロースが煙突から降りてきて夜の間に靴下にお土産を届ける」シナリオが出来たらしい。最近はウィーンでも親代わりに百貨店から品物を届けてくれる「出張サンタクロース」がいるそうだ。今回はそんな生活周辺の話題である。

・ 大晦日（ジルベスター）

いずこの国とも同様にジルベスターの催しは多彩である。ラートハウスプラッツを起点にリング内には屋台が並び、（赤）ワインを果物ジュースと砂糖で「割った」プンシュと称する甘酸っぱい飲み物が出る。夕方から夜に懸けて中心のステファンスプラッツ周りが賑やかになる。音にうるさいウィーンには珍しく空気ラッパが鳴り、爆竹が飛び、ドームの大鐘が鳴り響く。ドーム内ではパイプオルガンを背に、厳かな説教がある。非信者の私だが、時々拾えるドイツ語の説教を語学的に楽しんだことはある。夜には花火が上がる。ウィーンは花火の歴史でも由緒あるそうだが、早起き鳥の私には深夜まで待つエネルギーがない。来墺の初暮れに丘の中腹にあった知人宅に招待され、市街を見下ろして遠く眺めたのが最初で最後である。今年は「見納め」と思って起きていたい。

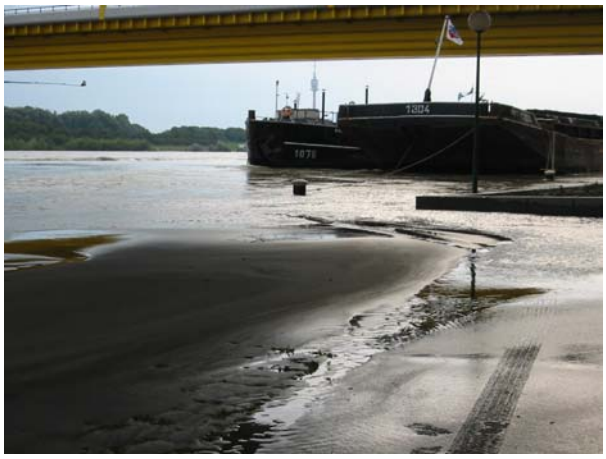
この初暮れの夜は雪だった。知人宅のベランダは天然の冷蔵庫であり、冷えたビールの味を今も思い出す。内陸だけに雪はほぼ例外なく乾いた粉雪で気持ち良い。冬は冬なりに楽しめるウィーンである。王宮の南、環状道路を隔ててウィーンの二大博物館である美術史美術館と自然史博物館が建っている。その間の広場にマリアテレジアの銅像がある。このマリアテレジアが夜のとばりの中で折りしの新雪を被った幻想的な姿は今も鮮明である。

明けて翌朝、つまり元日の朝、新春コンサートに家内と出掛けた。出掛けた先は楽友協会ではなくラートハウスプラッツである。夏の映画祭にも使われる大スクリーンに映し出される演奏と舞踏を、完全防寒スタイルで雪に降られて立ち見していた。翌二日は早速出勤日。同僚から朝一番に「お前、昨夜テレビに出てたな」と言われてキョトン。何事かと質してみると「今日のウィーン」なる夕方の報道番組にラートハウスプラッツでの立ち見姿で登場したらしい。女房に報告すると「ぜひ見たい」とねだる。「出掛けるから録画を見せて欲しい」と放送局に手紙を書いた。返事がないまま、一ヶ月後にビデオテープが届いた。しかし、ヨーロッパのビデオは方式が違う。こうなったら見たい。結局、一分のビデオを見るために、数万円のセットを買う羽目になった。

・洪水（2002 年 8 月）

ヨーロッパの広範囲にわたって記録的な大雨に見舞われた。高いところでは嵐で、日本からはるばるアタックにやってきたマッターホルンも登山禁止の憂き目に遭った人が多かったようだ。低地では雨が河川を氾濫させた。北海に注ぐエルベ河の氾濫はプラハ動物園の話題を日本にもたらした。

ドナウも相当な被害を生んだ。水位が普段より数㍍上がったという。濁流が渦巻き、暴れ河だったというかっての趣を呈していた。溢水が堤防の壁を越えたところも少なくない。周囲の牧草地や住宅の庭に流れ込み、旬日後列車で通りかかると電柱や立木の下部に濁水の水位を示す痕跡がはっきり残っていた。かって伊勢湾台風直後に訪れた名古屋の市街風景を思い出した。ドナウ河には河畔に歩行者用の道路がある。好天の日にはいかにも心地良い散歩道だがこの時ばかりは冠水し、その歩道沿いに営業するレストランは完全に床上浸水だった。自宅近くからこの河畔歩道に取り付くところに鉄扉がある。脇に小さく「洪水対策用」の標識があるが、普段は無用の長物である。建設以来何十年も「閉まらずの扉」だったが、今回の増水で任を果たした。これがなかったら我が家の庭にも水が押し寄せていただろう。



・カラオケと忘年会(2001 年 12 月)

ウィーンでもカラオケが浸透している。が、横文字の唄なので行ったことがない。ところがそのカラオケを肴に我が家で忘年会を催すことになった。建物の地下に共用のセラーがある。倉庫兼用だが一角にパーティ用の部屋が有る。そこを使うことになった。

実はある一時帰国の折りに旧知の友から聞いて簡便なカラオケセットを購入して自宅で楽しんでいた。マイクに曲が内蔵されていて、追加のチップに好みの曲を加えて調達した。あとはテレビに繋ぐだけである。画面の絵は曲の内容と一対一ではないが一応動画なので気分は出る。十二月始めのある日本人職員の集まりで口にしたら、あっという間に「地下ケラーでの忘年会」となった。独り住まいの私には食事の準備は荷が重い。しかし、参加者が各自一皿ずつ持ちよってくれた。お好み焼き、餃子、枝豆、おでん、煮物等。「お互い様」でありがたい。日本人だなあと嬉しくなる。私のチーズフォンデューもまあまあだった。「日本語で心置きなく話し、飲める雰囲気」に午後一杯皆酔っていた。実はこのセット、別の職場のクリスマスパーティにも要望有って出張した。ある日本人職員が私のセットのことを耳にし、ぜひと頼まれた。設置がてら会場にでかけ一曲唄ってきた。カラオケさま様。

・土筆とにら(2001 年 5 月)

三月最終の日曜日に夏時間が始まる。行動開始の季節である。が、四月はまだ寒い日が多い。「花冷え」とでも言うか。が、日に日に日照時間が伸びる。日本では一日三分と言うが、ウィーンでは一日五分は長くなるだろう。二週間も留守にして戻ると様変わりである。五月の声を聞くと急に夏になる。気温は上がり、花は咲き、人は軽装で出歩く。ある年、四月末に出かけた山では、高度 1500 ㍍で雪のため引き返した。雪は膝までありアイゼンで登っていた。同じ道の雪が二週間後には大方消えていた。

道ばたに土筆を見つけた。群生とまでは行かないがかなりの量である。幼い頃、母が作ってくれた甘酢のお惣菜を思い出す。「やってみるか」と同道の家内と一緒に摘む。地元の人が食するようには思えない。かってイギリスに滞在した頃の蕨の件を思いだした。日本人の仲間から「どこそこに蕨がたくさんある」と聞いて早速出かけた。確かにあった。が、皆穂が摘まれている。その筈である。教えてくれた日本人が全部持ち去った後だったのだ。今日の土筆は大丈夫。「食べる」と考えるのは日本人でも私の年代までではないか。家に帰って母を思い出しながら土筆の袴を取る。家内がゆでて、灰汁をぬき、甘酢で賞味する。

「珍味」と言っていいだろう。

他にも食に供せる野草は多い。そのひとつが「にらもどき」。現地名は「野生の大蒜」。手のひら大の青い葉で、春先の森に群生している。大蒜に香りが似ていて「餃子」に使える。味噌汁にもいけるが、韮とは違って「おしたし」にはならなかった。現地の人はスープに使うという。しその葉ふうに小さな刺様の葉脈を持つ青い草は自宅近くの散歩道にもあってててんぷらにすると結構いける。最近、ハイキング先で蕗の薹を家内が見つけ宿で即席の味噌和えを作ってくれた。

・ツェッケンとゴルフ

ツェッケンとは森や藪に棲息する 3～20mm 大のダニの一種（英名ティック、和名マダニ）である。夏の走りと終りに活動する。年始めに「予防接種」キャンペーンが始まる。素肌に噛みつかれると発赤や発熱の症状を起こし、時には生命に関わることもあるらしい。症状が日本脳炎に似ていると聞く。悪いことにこのツェッケンがヨーロッパの森に広くいる。歩き好きの私には困るのである。

話は着任直前の東京に戻る。赴任の挨拶のため訪ねた当時の通産省で、帰国中のＩＡＥＡ職員の方に会った。それまでにツェッケンのことは耳にしていたので、これ幸いとこの人に予防接種の必要性をお尋ねした。「ゴルフは上手ですか」と意外な反問が帰ってきた。残念ながら得手とは言えなかった。その旨をキョトンとしながら答えると「それじゃした方が良い、藪に入るだろうから」との説明に納得。

ところでこのツェッケン、釣り針状の嘴で噛む。噛み付かれて慌てて振り払うとその毒針が皮膚内に残ってしまう。釣り針をはずすように優しくはずせば被害は小さいそうだ。幸い私は予防接種のお陰か無害で済んでいて実体験がない。

・鵞鳥（ガンズル）の季節

毎年 11 月は鵞鳥の季節である。と言っても渡り鳥がやってくる訳ではない。鵞鳥は食用の家畜である。「土用のうなぎ」とでも言うところか。が、暑気あたりを避けるといった理はなさそうである。四世紀、今のハンガリーに生まれ、鵞鳥のお陰で「聖人」になった僧マーチンに由来する。

ある冬の寒い日、街の門で寒さに震えていた物乞いに彼は自分の外套を分け与えたことから、街の人は彼を慈悲と隣人愛のシンボルと崇め、ぜひ「僧として導いて欲しい」と頼む。本人はその器ではないと固辞するが周りの人は「どうしても」と彼を司教に推す。困った彼は身を隠し、誰か別の人が見つかってくれと祈っていた。隠れた場所が鵞鳥小屋でなければ上手く行くところだった。最後の瞬間に鵞鳥の鳴声で所在がばれて、聖人への道を歩かされることになる。

かくして聖マーチンの日「11 月 11 日」を中心にこの鵞鳥の季節がやって来る。あちこちの飲み屋で鵞鳥（ガンズルまたはガンズ）の特別メニューが出る。「こんがり焼けてたっぷりとバターのかかった柔らかいこの肉を口にすれば、このよだれを誰に感謝すべきかが自ずと分る」とちらしにあればいかにも美味しそうである。ローカル色のザウアークラウトとクネーデルが付くことが多い。チキンのウェルダンと味に大差はないと思うが、旬の「ホイリガー」ワイン（新酒）が良く合う。職場の仲間で毎年楽しみに出掛ける。

・「料理教室」（2000 年 11 月）

日本人会が日本人学校（小学校）の家庭科教室を利用してほぼ月一回開いてくれる。講師はＩＡＥＡ職員のご主人で、プロのコックである。つまり奥方が職員である。私も数回参加した。ほぼ一年前に「お父さん料理教室」として発足したが、好評で「女性の参加も」との強い（？）要請で共学になったらしい。共学になると優秀なのは女性。男性は肩身が狭くなって出席率が低下。そこで再び「お父さん教室」に戻そうとの声もあるらしい。確かに私の出た時のクラスは大半が若い奥さんたちだった。

食材にこちらで入手可能なものを使ってもらえるのが嬉しい。「キジの猟師風」とか「ターキー胸肉の薄切りソテーとピーマンのカーニバル風」というともっともらしいではないか。実際、教室で先生の手ほどきを受けながら作ると格好の昼食になる。自分の作品だからなおさらおいしい。食材はもちろん、料理に合うワインも先生が準備しておいてくれる。至れり尽くせりである。こんな料理なら楽しい。ところが、しばらく間を置いてから家で実践しても同じようには行かない。何かが抜けている。語学と一緒で教室を離れてからすぐの反復練習が大事ということだろう。

・「健康」について思うこと

世界保健機構（ＷＨＯ）の定義では「『健康』とは病を持たないだけではない、身体的健全に加えて精神的にも社会的にも健全であること」だという。また、「『健康』は自分が自分に贈れる最大の贈り物である」ともある人に聞いた。尤もである。何れも説得力がある。自分はどうか。

身体的には頑強とは言えないが、人並みには健康だろう。特段の秘訣はないのだが、毎朝のラジオ体操が良いのかも知れない。僅か 10 分の行事が一日のリズムを作ってくれる。持って来たビデオに感謝している。「一日一万歩」の目標も効果があるのだろう。こちらに来て人生初の入院生活をしたり、抗マラリア剤の副作用に悩まされたりはするが、持病だった胃潰瘍もピロリ菌とかの退治をしてもらってからは胃カメラと会わずに済んでいる。体重はほぼ一定値を保っている。

次に「精神面」。かって健康相談室の世話になったように元来ストレス耐性の低い「やわ」である。ウィーンに来てからは、ありがたいことにこの「ストレス」をあまり感じずに伸び伸びしているようだ。好きな山歩きに加えて、他の趣味（書、語学、スポーツ等）も楽しめている。「ぱんぽん」や「ウィーンの風」に自然な気持ちで記事を投稿までしている。健康相談室の世話にもなっていない。ここまでで一応「心身健康」な七年間だったと言えるだろう。

最後に「社会面」。自信がゆらいでくる。金や時間を無駄に遣い、不仲の他人も皆無ではない。「酒」を熱愛し、野次馬根性もある。聖人君子ではないからある程度は甘えるにしても、生かして来てくれた社会へ恩返しをしているのか。仕事を通して貢献した、と少しは思うが不十分な「達成感」である。今後の人生をどう生きるかを天は見ているのかも知れない。これからは、「人を喜ばせ、自分も満足できる」ということに時間を使いたい。それでこそ「健康な人生」と言えそうだが、思惑通りに行くかどうか。少なくとも「酒」への情熱は一生続くだろう。

・来人

在任中多くの人が立ち寄ってくれた。公務を結び付けて寄ってくれた人も嬉しいし、「私が居るから」と純粋に私的にウィーンを旅程に組み入れてくれた人の居るのが嬉しい。他人に比して多いかどうかより、満足できる程度に多くの人が寄ってくれた。会社や社外での職場の先輩、同僚、後輩。大学、高校の恩師や旧友。書や山、スピーチクラブの同好の友。こういう人は、普段はあまりウィーンを訪れる機会のない人が多い。そんな肩の凝らない仲と近況を語り合うのはこれとないレジャーだった。

そういう人達とは僅かな合間に近郊のスポットに出掛けたり会食の機会が多い。告白すると「ウィーン的で美味しいもの」と所望されるのが負担である。住み慣れると「ウィーン的で美味しいもの」に思い当たらないのだ。どちらか一方なら良い。「ウィーン的」なら飲み屋（ホイリゲ）でワインと豚肉のフライ、「美味しいもの」なら和食、と思うのだが両方を満たす献立が難問である。それに私的な好みが絡む。最後だから「時効」と思って書く。実はその来人が旅行の後半にウィーンに寄ってくれると私に好都合なのだ。「そろそろ日本食が恋しいでしょう」と言えるのだ。実は私が食べたいのである。日本から直行の人はほぼ「ウィーン的で美味しいもの」とおっしゃる。大体は「ウィーン的」な場所に出掛ける。多くの人はそれで楽しんでもらえた。やはりそれなりには美味しく、私が慣れ過ぎただけなのだ。

関連して私自身の一時帰国について。平均して年一度くらいか。その度に、「会いたい、会おう」と言ってくれる人が居て嬉しかった。日が飛ぶように過ぎて行った。なるべく多くの人に会いたかったが、時間が足りず不義理に終わった人もある。果報者だと思っている。和食、温泉宿、カラオケ、展覧会等思い出す。ウィーンを訪ねてくれた人達と日本で会うのもまた楽しかった。